



乳鉢



新しい趣味

大分県医師会 織部 淳哉

2018年10月から父の診療所で勤務して3年が経ちました。これまで地域医療に携わった経験に乏しく、日々の診療でいまだにストレスを感じています。それでも以前より休みを自由に使えるようになり、せつかくの休日を有意義に過ごすため何か趣味を始めようと考えました。もともと飽きっぽい性格で趣味と呼べるようなものはなく、一時期ゴルフをやっていましたが腰痛が出たのとあまりに下手すぎたためにあきらめました。

小中高生のころ、魚釣りが好きだったのでそれにして、船釣りや磯釣りは初心者には敷居が高かったので、堤防釣りを選びました。最初は餌釣りから始めて、釣り雑誌にライトショアジギングという釣り方の特集があり、さも手軽でよく釣れるように書いていたので飛びついてしまいました。ライトショアジギングとはルアー釣りの一種です。名前の通りショアジギングのライト版で、ショアジギングが100g前後の重いルアーを使いブリやサワラなど大型の青物をターゲットとしているのに対して、ライトショアジギングは30g以下の軽いルアーでサバやハマチなど小～中サイズの青物やカサゴなど底にいる魚をねらいます。ルアーとは疑似餌のことで、ジギングではルアーの一種であるメタルジグという小魚に似せた金属製のおもりを使用します。釣具店の店員に教えてもらいながらルアーや竿、リールなど道具を揃えて一昨年からはじめました。堤防からメタルジグを遠投して大きく竿を振り、アクションをつけて魚を誘います。ひたすら竿を振るので筋肉痛になることもあります。本物の餌をつけずにできるので毎回釣具屋に行く必要がなく、少し時間があれば気軽にできるところが気に入っています。まだ自慢できるような釣果はなく、ターゲット外のエソばかりが釣れています。それでも30～40cm以上の大きさがあるので、針にかかるとけっこう手ごたえがあります。エソはかまぼこやさつま揚げの材料になりますが、捌くのと料理が面倒で釣れても逃がしています。味はいいらしく、釣ったエソを逃がしていると他の釣り人から欲しいと言われあげたこともあります。たまにアジやサバが釣れると喜んで帰ります。何も釣れないときは、天気がいい日に海に出かけて釣りをするだけでいい息抜きになった、と思うようにしています。

残念ながら、最近では新型コロナ感染の流行のため釣りに行けていません。去年我慢できずに県南の釣り場へ出かけると、「感染のリスクがあるのでお帰りください」という立て看板を目にしてすごすごと引き返しました。仕方がないのでメタルジグを集めて自己満足しています。メタルジグは魚にアピールするため、きらきらして購入意欲をそそられます（自分が釣られているのかも）。今度の趣味は途中で投げ出さずにやり続けて、いつか大物を釣り上げようと思っています。



がんばれ、大分トリニータ

日田市医師会 新 関 修

大分医大バレーボール部の先輩である吉良先生から断れないオファーをいただきました。2022年シーズンが開幕するので20年前にはまって以来応援しているトリニータのことを書いてみようと思います。

中学ではサッカー部に所属していました。ちょうどキャプテン翼の影響でサッカー人気が高まっていた時期でした。大学ではバレーボール部とコーラス部の兼部をしていました。Jリーグが開幕し、ドーハの悲劇も中継を見ましたが、その頃サッカーはTVで見るものでした。大分トリニティーが発足したのは知っていましたが試合を見る機会はありませんでした。

トリニータにはまったのは仙台に国内留学していた頃でした。研修室の先輩だった安部まゆみ先生（大分医大2期生）から誘われて仙台スタジアムにトリニータの応援に行き、生観戦の楽しさを知りました。大分から離れて大分の良さを感じたこともあると思います。仙台や山形でのアウェイゲームを見に行くようになりましたが、平日のナイターだと関東近辺から応援に来るサポーターも少なく、すぐに顔見知りになりました。J1昇格を争うなかで自然と応援にも力が入るようになり関東以北の試合にもちょくちょく応援に行くようになりました。関東でナイターがあると仙台行きの新幹線に間に合わないのが夜行バスで帰ったり、サポーター仲間の家に泊めてもらったりと、今となっては良い思い出です。2002年大分に帰ってきましたが、この年にJ2で優勝してJ1に昇格しました。大分赤十字病院の同僚とよく応援に行っていました。スタジアムでも多くの先生を見かけました。

2008年ナビスコカップ決勝は国立競技場まで応援に行き優勝を見届けることができました。その後はJ2降格と入れ替え戦勝利を経てのJ1昇格（こちらも国立競技場まで応援に行きました）、J2降格からJ3までの降格もありました。最近の片野坂監督就任後の活躍は皆さんご存知の通りです。2021年シーズンはうまくいかず、残念ながらJ2に降格となってしまいました。天皇杯での活躍には皆さんも興奮されたのではないのでしょうか。

週明けに同僚に「勝って良かったね」とか「残念だったね」と声をかけてもらい、トリニータの話が良いコミュニケーションとなっていました。また最初はニータンを見にドームに行き前半が終わるころには飽きて階段をうろうろしていた子供が、トリニータを応援して結果に一喜一憂してくれるようになったのに時間の流れを感じます。

2018年に日田に帰ってからはなかなか大分まで応援に行けなくなりました。さらにこのコロナ禍でもっぱらDAZNでの応援になっています。コロナ禍が終わり、スタジアムで大きな声をあげて応援できる日が来ることを願いながら、しばらくは日田でテレビの前で応援することになりそうです。2022年シーズンの大分トリニータの活躍を期待しています。

次は織部消化器科の織部淳哉先生にお願いしています。



週末えせライダー

大分県医師会 吉 良 哲 也

大分市東部の大在で循環器内科を開業させて頂き、9年が経ちました。ここ2年近くは御多分に漏れず、新型コロナに振り回されています。かつてない経験故に、一医療機関の長として新たな創意、選択、決断が求められることを痛感し、発熱外来診療や新型コロナワクチン接種においても、実施や運用方法について悩まされることが多かったです。

そうしたストレスも抱えつつ、貴重な週末の過ごし方として、昔乗っていたバイクに乗りたい気持ちが高まってきました。大学生の時にオフロードバイクに乗っていましたが、卒業後は乗ることもなくなり、すぐに手放していました。数年前からまた走ってみたいくなり、連休などにレンタルバイクを利用することもありましたが、結構なレンタル料がかかることから、これを機に思い切って購入することにしました。

購入したのはKawasakiのVersys250、仮面ライダーが乗っているようなある程度の悪路も走れるバイクです。バイクを操ることももちろんですが、知らない道を通ることが好きな自分にとって、思いがけない場所に民家や集落を見つけたり、どこに通じているかわからなかった道が予想外のところに繋がっていたりといった発見を楽しく感じています。たとえ道が狭くなったり行き止まりであっても、バイクなら難なく通れたり引き返せますし、また時にはスマホをホルダーに装着し、ナビにしてGoogle mapを見ながら、知らない山道や林道に分け入ったりもできます。

週末といっても土曜日は午前中診療、日曜日も午前中はクリニックで事務仕事等をしており、バイクに乗れるチャンスは土日の午後、ただし買い物や犬の散歩等の家の用事を済ませてからになるので、2時間程度のライドになります。行先は挾間から別府内成方面、また野津原の県民の森あたりに良く出かけます。連休などで少し時間が取れる時には県南の海岸線や湯布院・九重を走ると気持ち良いですし、今のところ延岡から高千穂・阿蘇を回ったのが一番の遠出です。

辛い肝を冷やすような場面にはこれまで出くわしていませんが、バイクは不測の事故でも致命的となるため、いつまでも家族に心配はかけられないとも思っています。いつか佐賀関から国道九四フェリーで三崎に渡り、佐田岬半島を通して、四国から瀬戸内しまなみ海道を抜けて尾道まで行ってみたいと思っておりますが、日帰りでは無理ですし、いつになるか分かりません。その夢を叶えるまではもうしばらく週末のバイクを楽しみたいと思っています。冬にバイクに乗る根性はないので現在お休みしていますが・・・



「コロナ禍の楽しみ」

宇佐市医師会 石田 修二

開業医生活も20年目に入りました。このリレー随筆を担当するのも今回が3回目になります。5年前の前は、師匠と尊敬する藤野先生からの紹介で断れるはずもなく、今回だけはとお引き受けし、「次は引き受けませんよ」と言っただけなのに……。それなのに今回は、夜電話をいただき開口一番「ゴメン、うっかりリレー随筆を引き受けてしまった。次頼むね!」とのこと。まあ前回の「次は修ちゃんにしたいから!」との事後報告よりはいいかと、こうしてまた苦手な文章書きをする羽目になりました。

コロナ禍で様々な生活制限が始まって、早いもので1年半が経ちました。この間、公共交通機関(バス、電車、飛行機など)は全く利用しておらず、県外に出たのも自家用車で福岡に数回行ったくらいです。あれほど飛行機に乗ることも多く、航空会社のステータス獲得を楽しんでいたのが嘘のようです。

県外どころか地元の宇佐から出ることもほとんどなくなり、唯一の外出がゴルフとなりました。それまでは月に1度行ければいいほうでしたが、今では月に2～3回ラウンドするようになりました。体調も良くなり、そうすると練習や体操、時々筋トレも出来るようになり、身体的には非常に健康的で理想的な生活となっています。

精神的にはどうかというと、以前はシャンクが止まらず、ざっくりにダフリ、トップと本当に悲惨な状況が続き、スコアはというと100を切れないどころか110以上叩くこともしばしばで、(米国留学中は80台も出ていただけに)何度ゴルフをやめようと思ったことかわかりません。それでも続けてこられたのは、酷いスコアにもかかわらず誘ってくださる先生方のおかげです。いざゴルフにはまってラウンド回数が増えるとなぜかスコアも良くなり、スコアが良くなると気分もすごくよくなり、結果精神的にもいい状態と言えます。

コロナ禍が収束し、以前の生活が戻ってくる日がいつになるのかはわかりませんが、ゴルフは続けていきたいと思っています。「80歳になってもラウンドできるような健康を保つ」、それが今の目標です。ゴルフとご一緒していただける仲間感謝して、この駄文を終わりたいと思います。

藤野先生、もう次は知りませんよ!



去者不追，来者不拒

臼杵市医師会 藤野孝雄

表題はご存じ孟子の格言だが、最近の私のお気に入りである。

父母の後を継承開業して30年近くになるが、日々の診療で自分にできることは最大限行っているつもりでも、通院を中断される患者さんは一定数おられる。このような時にはこれを思いだす。「去る者は追わず」

令和2年3月19日は忘れられない日となった。当院かかりつけ患者さんのコロナ感染が県内2例目の発症として、記者会見の場にて当院の実名が報道された日である。勿論、罹患された患者さんが一番辛い思いをされたことは言うまでもないが、この日以降私を含め職員一同も強いストレスにさらされ、長く憂鬱な日々を送った。コロナに翻弄され同じ思いで過ごされた医療従事者は沢山いらっしゃるだろう。外来患者は激減し、従来妻が呆れるほどの楽道家である私が、この先診療出来るだろうかと軽い鬱症状に陥った。しかし、ありがたいことに時が過ぎ多くのサポートを受けながら「去る者は追わず」の心境で、日々の診療をコツコツと繰り返しているうちに、どうやら今後も開業を続けていく自信を徐々に取り戻した。コロナ治療の道筋も出来、ワクチン接種も進んでいる現状に一息ついている。その節は臼杵市医師会前会長東保先生、臼杵市中野市長、大分大学循環器内科・循環器内科同門そして神経内科の先生方には心強い支援を頂き、感謝申し上げます。

さて、話は変わるが、私のゴルフ歴は中断時期があるものの40年近くになる。「趣味」と言えるほど熱心にプレイしてきたわけでは無い。年に数回のラウンドを呑気に楽しんできた程度。しかしこのところ多少時間がある。何しろ研究会、学会もオンライン。東京にもすっかりご無沙汰で、この一年半大分県から一步も足を踏み出していないのだ。そこで一念発起し、見苦しい完全自己流のフォームの改造に取り組んでみた。ところが古希を目前にしてのこの試みが思わぬいばらの道。それでも人生初と言っていいほどの真面目さで素振りを続け、ユーチューブ動画で研究し、こんな下手な私を見守り続けてくれた心強い仲間の協力もあり、このところ漸く少しは綺麗なスイングに近付きつつあるように思える。「来る者は拒まず」とゴルフの神様がささやいて下さると信じて。

次は宇佐市医師会 石田修二先生をお願いします。



トングとわたし

大分東医師会 平 川 東望子

開業してもうすぐ1年になります。もともと活動的ではありませんでしたが、家を離れることが難しくなり、これまで以上に自宅にこもった生活を送っております。さて、ささいなことではありますが、私の地味な日常をご紹介しますと思います。

我が家には今年10歳になる雄のミニチュアダックスフントがいます。10年前、夫と子供が突然連れて帰ってきました。名前はトングです。正式名称は「トング・キング・パラダイス」です。当時幼稚園の年長だった次男が名付け親です。血統書付きの正真正銘ミニチュアダックスフントのはずだったトングですが、もはやミニチュアではありません。体重が10Kgあります。散歩に出ると、30分くらい家のすぐ外に座ったままで過ごし、10歩ほど前進したかと思うとすぐに息が切れて抱っこをせがんできます。ちょっとした筋トレができます。私は産婦人科という仕事柄赤ちゃんを抱っこする機会が多いのですが、トングのあまりの重さに比べると、赤ちゃんたちは宙に浮くかと思うほど軽く感ぜられます。

このトング、甘やかしの頂点で生きてきました。家の中でうんちやおしっこし放題、おやつ食べ放題、思い通りにならないことがあれば「フンッ！」と鼻を鳴らして横を向くなど、わがまま放題です。そのうえ、それらすべてがなぜか大仰に褒められるのです。そんなトングですが、人生の折り返し地点を過ぎたこともあり、老犬らしい考えをするようになりました。「兄2人の大学受験など、家族の人生の節目に俺に万が一のことがあったらどうするんだ！」と、大メシを食らい、大イビキをかき、大腹を丸出しにしながら深々と考えているのです（これも甘やかしです）。肥満のせいで腰が悪いためダイエットもすすめられているのですが、食欲旺盛で食べたいものを食べたいだけ食べながらのダイエット。当然難航中です。

トングはスポーツ観戦が好きです。私の隣で時には白目をむきながらじっとテレビを見つめています（寝ている？）。私自身も運動神経はさっぱりですがスポーツ観戦は大好きで、中高とも女子校だったのに高校野球の予選会場でひたすら試合を見たり、プロ野球の応援に通い詰めたりしていました。大相撲観戦も好きで、両国や九州場所に行っていました。今はトングとともに、2ヶ月に1回の大相撲をととても楽しみにしています。本場所が始まると、トングは毎日序二段あたりからじっとテレビを見つめ、勝負の行方を追っています。

この1年で自宅にいる時間が増え、トングと接する時間も増えました。トングという家族に振り回されながらも、おかげで私は愉快的な毎日を送っています。これからもトングと共に地味な日常をしっかりと過ごして行きたいと思っています。

次回は臼杵市医師会・藤野孝雄先生を推薦させていただきます。よろしくお願いいたします。





CTGモニターを眺めながら想う

大分市医師会 石井 照和

大分市下郡に産婦人科を開業して早いものでもうすぐ3年を迎えます。

開業してから自由になる時間も増え（拘束時間は長くなりましたが…）、趣味の読書に時間を割くこともできるようになってきました。今回、リレー随筆を、とのお話を頂きましたので好きな書籍について好きなように記したいと思います。

お薦めは、森博嗣先生の「彼女は一人で歩くのか？」から連なるWシリーズ、「それでもデミアンは一人なのか？」から連なるWWシリーズです。森博嗣先生はご存知の方もいらっしゃると思いますが、某国立大学工学部准教授でありながら、ドラマ化もされたデビュー作「すべてがFになる」を始めとして多くのミステリ作品、エッセイなどを手掛けている多才な方です。ドラマ化された「すべてがFになる」から連なるS&Mシリーズ、Vシリーズ、四季シリーズが工学系ミステリであるのに対して、Wシリーズ、その後のWWシリーズは生命工学系ミステリとなっています。

舞台は近未来の世界。ウォーカロン（walk-alone）と呼ばれる、人工細胞で作られた生命体の存在する世界。人工細胞から作られたとはいえ、人間との差はほとんどなく容易に違いは識別できない存在。また、AI（artificial intelligence）は発達し、それぞれのAIにより個性を持ち始める世界。人間とウォーカロン、人間とAIとの関りを通して人間とは何か、命とは何かを問いかけてくる作品群となっています。近未来を舞台とする小説としてはよくある設定ではあるのですが、森先生の描く近未来は理系的視点から描いているため非常にリアリティがあり、数十年後の世界を身近に感じることができる作品となっています。

人工細胞の発達により、人間は生きている細胞がある程度残っていれば再現が可能です。元の記憶もデジタル化されていれば、復元が可能です。仮に外傷や疾病で臓器が機能しなくなった場合には、人工細胞で補完することで人間は死とは無縁の存在になっています。ただ、人工細胞の影響なのか、原因ははっきりしないものの、新たな生命は生まれなくなってしまう。新たな人間が生まれ代わり、労働力としてウォーカロンの存在が大きくなっていきます。ウォーカロンは人間ではないという建前で、出荷段階に感情の抑制処置を施されるため、感情の抑揚に乏しく、人間を害することはありません。しかし、感情の抑制処置に何らかの原因で不具合があれば、感情を持つウォーカロンとなります。人工細胞から生まれたとは言え、感情を持ったウォーカロンは人間とどう違うのでしょうか？

また、人間とAIとの差も小さくなっていきます。肉体を持たず、脳のみの存在となってバーチャルの世界を生きる人間、脳すら持たずバーチャルを生きる人間。実世界においては子供が生まれなくても、バーチャルの世界であれば可能です。感情を理解できるAIとバーチャルのみで生きる人間。その境はどこにあるのでしょうか？

原稿を書いている今も、分娩待機中です。もう少しで新たな生命が誕生します。人間とは、生命とは、不思議な存在だと思いつくづき思いながら新たな生命が無事生まれてくるよう、日々精進していきたいと思います。



「待合室の本」



大分市医師会 今 木 裕 幸

大分市で令和元年に開業しもうじき2年となります、いまき眼科の今木裕幸です。

山口県出身ですが、祖父は国東出身で満州鉄道社員として働き終戦後山口に引き揚げています。自身は九州大学卒業後、医局派遣で別府医療センターに赴任したことがきっかけで県内で開業し当地には不思議な縁を感じています。

何について書こうか迷いましたが、随筆とは思ったことを書くことと思い今回は待合室の雑誌について考えたことを書こうと思います。

当院では開院当初より、待合室には雑誌（情報誌等）を置いておりましたが、COVID-19流行に伴い、以来何も置いておりません。それなりに雑誌はいつもくたびれる程度には利用されていたので非常に残念でしたが、手指で触れるもの全てを消毒することが原則の院内では毎回全ページをアルコール消毒してゆく訳にもいきません。ただ、この世情を反映してか雑誌類が無いことによるクレームは1件も無いことが救いです。小生も、リスク回避のため病院や床屋で本を手を取ることは無くなりました。

その代わり、よく見ているとこれまでもそうでしたが、待合室に設置してある地上波テレビや医療情報を流すサイネージをみている方と、スマホを見ている方に2分されるようになりました。この時代、待合室に本や雑誌は無くとも問題は無いのかもしれませんが、「周囲の物に触れてはいけない」「隣の人と大声で喋ってもいけない」となると実際はこのくらいしかすることは無いのだと思います。体感としてはスマホを見ている方が増えた印象で、スマホという万能閲覧機の凄さを感じました。

高校・大学生の頃は、散髪屋や食堂で置いてある漫画や雑誌を読むのが非常に楽しみで続きを読むためにわざわざそこへ行く程でした。このような、待合で自分では普段買わない本に目を通す文化は人間にとって大切なのでは？と考えています。聞けば雑誌類の国内売り上げは10年前と比べ漸減傾向で半分になっているとのこと、この先こういう文化は消え去ってしまうのかと思うと少し寂しいです。

最後に、大きく変化してしまった世界がいつか元に戻ることを信じて、今を頑張っていこうと思います。次回は、同じ滝尾地区で同時期に開院された石井照和先生にお願いいたします。



「コロナに思う」

大分市医師会 阿部 壽 徳

10年ぶりに乳鉢への投稿となります。

今回はちょうど東日本大震災での空前絶後の大災害の時で、連日連夜報道が繰り返されておりました。近年、世界各地での地震や水害などの自然災害や病原性感染症の頻発・被害が日々取り上げられ、更には残忍非道な殺人や虐待などの事件報道も後を絶たず、自然災害はもとより全てのあらゆる事件さえも、地球の異変により増加しているのではないかと思っている昨今です。

私事ですが、一昨年の秋にクリニックを開院致しました。その数か月後に新型コロナウイルス感染症が蔓延し、全世界で多数の犠牲者を出したパンデミックとなりました。わが国でもご存じのごとく緊急事態宣言が発令され、日本中が不安に駆られ浮足立っていました。かくいう私もまさかそんな事態に陥るとは全く予期しておらず、不織布マスクやガウン、消毒用アルコールなどを必死に探し求めたことが思い起こされます。自宅でも米や冷凍品、インスタント食品などを備蓄のため買い集めていました。マスクで何十年ぶりかのニキビ(?)もできました。自分自身を今振り返ってみて、あらためてすごい針の振れ方だなと痛感します。あれから1年あまり経過し、今ではワクチンが開発され、日本でもようやくワクチン接種が始まり、なんとか終息への希望も見えてきたかと少し安堵しています。しかし同時に続々と変異株は出現し、いまだ感染者数や重症者数は多く推移しており、できるだけ早い集団免疫の獲得を待望しているところです。

また外出自粛や人流抑制の行動制限は、消費の落ち込みによる経済的打撃を招き、特に外食やレジャー産業などは報道を見るまでもなく、身近なところまで影響が強く及んでおり、経済的な犠牲についても心が痛みます。オリンピック・パラリンピックの開催の是非についても同様に、感染の抑制と医療確保、外出消費の緩和と経済回復、どちらもできなければ犠牲者が増えていくという痛烈で切実な課題が突き付けられました。

人間は元より十人十色、更になおかつ立場が替われば意見も変わるといわれ、各人それぞれの中にも様々な考えを同時に持ち合わせているものなのでしょう。だからこそ人知を駆使して、今やるべき事と今後の方策を考えなければならないはずであり、今こそ人類の大同団結を切に願わずにはられません。

「天網恢恢疎にして漏らさず」これは本来、悪行や悪人を天の網が漏らさないという意味ですが、むしろ天網が本当に困っている人を見逃さず、いわゆるセーフティーネットの役割で人類が抱える様々な問題を救済してくれたらいいと私は心より望んでいます。



「中津ノススメ」 ～赴任して感じた中津の良いところ～

中津市医師会 内 藤 英 二

今回リレー随筆とのことでバトンを受けましたが、中津が生んだ偉人である福沢諭吉の学問ノススメにちなみ、「中津ノススメ」を以下徒然なるままに語らせていただきます。

私は中津の現在の病院に赴任してこの春3月末で満5年を迎えました。赴任当初は周囲には大分大学卒の馴染みの先生方は数少なく、不安な気持ちで毎日を過ごしていたことを思い出します。しかし県北の先生方は若輩者の私を温かく迎え入れてくださいました。中津市の医師会の規模は大分市の医師会と比較するまでもなく小規模なのですが、お互いの顔が見える家庭的な居心地の良さがあります。新型コロナが流行し始めてからは控えているのですが、オフでも皆が仲良く、年齢、キャリア、専門分野の垣根なく美酒を片手に深夜まで語り合う機会も多くあります。このような風通しのいい医師会ですので自分の専門外の疾患で困ったときには電話一本で快く御対応して頂いており大変心強く思います。私にとって中津は「医師として居心地の良いところ」です。

引き続き住み心地について考えてみます。私は筑後地方の柳川市出身です。柳川は筑紫平野の南端に位置し、南西には北原白秋が帰去来の中で詠んだ「火照り沈む夕陽に朱く染まる有明の干潟」があり、北東部には耳納山地・筑紫山地を遠く眺めます。中津は中津平野の北西端に位置し、北東には神々しく昇る朝陽に照らされ輝く中津干潟を望み、西方は筑紫山地・英彦山地を仰いでいます。土地の風景に共通点が多く何処となく懐かしさを感じます。ただ気候は柳川の温暖湿潤な九州型気候区とは全く異なり、中津の乾燥した瀬戸内海気候区は年間を通して大変過ごしやすく感じます。そのほか、都市部（福岡）へのアプローチ約1時間、リゾート地（湯布院）へのアプローチ約1時間、城下町の風景、祭り（中津の祇園、柳川のおにぎえ）と多くの共通点があります。中津、柳川ともに風光明媚で程よい都会度であり美味しいものも多く、「住んで良いところ」です。

最後に「医師としての生きがい」について。県北地域は衛生陶器・住設会社、自動車工場、半導体・集積回路工場ほか多くの企業があり、加え経済圏・医療圏を同一とする豊前市にも工業地帯が存在しており若年世帯も比較的多くなっています。このような事情から、中津医療圏に於いては（患者の）「人口減と年齢層割合の高齢化」は県平均と比して少し先のことかと思われます。当院ではこの数年、患者数が増加しており若年患者数も総数に比例して増加しています。中津は若年の患者さんと将来まで長く向き合える若い医師を必要としています。また、人的医療資源自体も十分とはいえません。従い、とても忙しい日々なのですが生涯に渡る医師の実力発揮の場として不足はない、「やりがい満ちたところ」です。

まだまだおススメすることは多いのですがこの辺りでリレー随筆の筆を置きたいと思います。最後までお付き合い頂き有難うございました。



乳鉢



塞翁が馬

中津市医師会 松永直子

「はじめまして。院長の松永直子と申します。」と診察室に入ってきた新規の患者さんにご挨拶すると、「この理事長先生の娘さんですか、親孝行ですね。」とおっしゃって頂くことがある。大変ありがたいお言葉だが、最初はそんなつもりはなかったのに、というのが私の本音だ。

私が子供の頃、病院長の父は連日のように当直するなど、多忙を極めていた。たまに家に帰ってくる父はとにかく厳格で、父の存在に気付かずにいつものように姉妹喧嘩をしていた日には、こっぴどく怒られた。やっと祖母から買ってもらったファミコンは初日に取り上げられ、しまいにはテレビも撤去され、小学校では「ザ・ベストテン」の内容で盛り上がる友達の会話に全くついていけなかった。高校生になった時、担任の先生から「親が医者なのだから、医者になるのが当然だろう。」と言われ、結果的に医学部を志した。ただ、親からは離れたい一心で、遠くの大学の医学部を狙ったが、ことごとく失敗した。1浪目のセンター試験も失敗し、国立医学部の合格予想は軒並みE判定だったが、大分医科大学の医学部だけはA判定だった。でもよく見たら医学部医学科ではなく、医学部看護科だった。私がマークミスをしたのだ。しかし、このA判定に勝手に気分を良くした私は、まさに背水の陣で大分医大を受験し、合格した。

医学部に入っても、なりたい医師のイメージは沸かないままだったが、医師国家試験に合格した途端、臨床への扉が一気に開かれた。大分大学第2内科の教授や先輩の先生方の熱心なご指導の下、無我夢中で目の前の患者さんの困難に取り組んでいるうちに、呼吸器学の奥深さと面白さにどっぷりはまり、気づけば呼吸器科医になっていた。大学病院での勤務は、子育てをする女医にとっては居心地のいい環境だったが、卒後10年目の春に、医師である夫から、一緒に松永病院に帰ろうと説得され、私はようやく帰る決心をした。

今年の春で、それから8年になる。以前は想像できなかったが、父とよく会話をするようになった。父の専門分野である循環器に関する様々なこと、地域医療の面白さ、介護・福祉の重要性、人として真っ直ぐであることの大切さなど、会話の内容は多岐にわたり、勉強になる。また、不思議なことに、父との関係性が良くなると、自分の心に余裕や充足感が生まれ、何気ない日常の中にも幸せを感じるが増えたように思う。これまでの人生を振り返れば、遠くの医学部受験に失敗したことは、塞翁が馬だったのだろう。私はこれからもこの地域に根差し、志を共にする仲間とともに、循環器と呼吸器という命に深くかかわる領域で、質の良い、温かい医療を追求していきたい。



休日発熱外来

豊後高田市医師会 水之江 俊 治

豊後高田市医師会、みずのえ呼吸器内科クリニックの水之江俊治と申します。

「今年の冬、インフルエンザが流行して、新型コロナも流行したらどうなるんだろう？休日当番医をする自信がない」と去年不安に思っていたことが頭によぎりました。

原稿の締め切りが近づき、テーマを何にしようと考えながら、本日（3月7日）宇佐高田医師会病院の休日発熱外来で勤務しています。この休日発熱外来は、インフルエンザ流行期に備えて、通常の休日当番医の支援として、宇佐高田医師会病院内で令和2年12月20日から令和3年3月21日の日曜、祝日、年末年始の22日間開設されています。幸い、今年はインフルエンザの流行がないまま冬の寒い季節が過ぎようとしています。宇佐市、豊後高田市の市民の方はもちろん、小さなクリニックを開業している自分としても非常にありがたい外来です。普段の診療において、発熱患者さんを診察するのに、電話問診、診察、会計、アルコール消毒、換気を行うため、1人あたり最低30分はかかります。昨年までは冬の時期の休日当番医は、発熱やインフルエンザ患者さんがたくさん来院されましたし、コロナ禍の今年の冬はどうなるんだろうと不安に思っていました。宇佐市医師会の先生を中心に、豊後高田市医師会、宇佐高田医師会病院の先生や看護師、検査技師、薬剤師、事務の方々、ワタナベ調剤薬局の方々の協力のもと、休日発熱外来が開設されました。微力ではありますが、その中の一員になれましたことは、大変光栄に思います。

主要都市の緊急事態宣言の発令の効果もあり、大分県では新規の新型コロナウイルス感染者が減っています（3月7日時点）。本日の休日発熱外来の受診者は4人で、幸いすべての方が新型コロナウイルスPCRは陰性でした。また、本日の大分県の新規感染者数は0名でした。これから新型コロナウイルスのワクチンも本格的に始まります。ワクチンにより集団免疫を獲得し、新型コロナウイルスが流行しなくなり、重症化する患者さんが減り、社会全体が感染症から守られることを祈るばかりです。早く、今までの生活に戻って欲しいと思います。

最後になりますが、専用病床、重症病床を始め最前線で診療を続けられている医療スタッフの皆様には大変感謝申し上げます。